
ド・ド・ド・ドミナント！

ストーム2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ド・ド・ド・ドミナント！

【Nコード】

N0972S

【作者名】

ストーム2号

【あらすじ】

これは、彼女^がの夢を叶えるために突っ走るラスボス＋愉快な仲間達と、深い眠りから叩き起こされた機械仕掛けの神達の物語

それは世界を侵す者共の記録（前書き）

ここでは初めまして、2号です！
これからよろしくお願いします！

それは世界を侵す者共の記録

ドミナント…それは、戦いの天才、という名を冠した無機生命体
形戦闘兵器にして人工の神。

たが実際は結構愉快な奴らであつた；

これは、ひょんなことからそのドミナントの主人になったとある青
年と、機械仕掛けの神達のある意味荒唐無稽な日々の記録

よーするに、ドミナント達と、主人公＋ラスボス周りの人達（幹部＆下っぱ
ーズ）が送るギャグ成分多めの小説。

大丈夫だ。問題ない。

「…問題大有りのように感じるが…」

「……肯定……」

「まあ、暖かくこの2号を見守ってやってくれ。」

プロローグ0（前書き）

でわ、プロローグはいりまーす（「。□。」）「

プロローグ0

事の始まりは様々な世界で起こった。

それも…同時に。

“それ”は、まるで最初からそこにあったかのように存在していた。

“それ”は、建造物だった。

…それも、とても広大で巨大。

“それ”は、地上とその世界の衛星に現れた。

地上には、三種類の”それ”が多数…。

衛星には、柱のようにそびえ立つ”それ”が一つ。

”それ”は、遺跡と呼ぶには異質過ぎた。

”それ”は異質な金属で出来ており、風化や劣化した形跡はない。表面には、緑色に光るラインが血管のように走っていた。

しばらくして、それぞれの世界で、”それ”の調査が開始された。

『グラニデ』という世界では、グランマニエという国を代表に、軍を護衛に付けての調査団が結成され…

『ミッドチルダ』という世界では、『時空管理局』という組織が”ロストロギア”の可能性があるととして、数隻の時空航行艦をいれた大規模な調査団を…

『ハルケギニア』という世界では、『アカデミー』という研究機関

が、調査団を派遣し…

『地球』という世界では、それぞれの国が、国連での話し合いの後、それぞれの国で協力しながら慎重に調査を進め…

『ヘリオス』いう世界では、『東シユレイド連合国』と『西シユレイド皇国』が積極的に調査団を送って、調査を進めた。

全ての世界は、『新たな文明が発見された』という期待と歓喜と言
い知れぬ少しばかりの不安に包まれた。

たが、数週間後に事態は一変する。

全ての世界で同時に、調査団との連絡が途絶えた。

それぞれの世界の政府は原因を調べるため、”それ”にギルド、人、
部隊を送り込んだ。

たが、それは様々な世界、組織、人々を巻き込んだ”荒唐無稽なお
ときばなし”

の始まりであつた。

「みんな、今からたのしいたのしいおとぎばなしの始まりだよ！役者さんは『彼等』観客は『君たち』」

「これから始まるは、出会いと別れ、歓喜と狂気、憎悪と怨差の愉快で仕方ない【おとぎばなし／物語】。さあ、もう開幕の時間だよ。それではとつくり御覧あれ……ふふふ」

物語は、ココハラハジマル…

プロローグ0（後書き）

まだ主要キャラが全然出て来ない…；

早く武達とアドリビトムの邂逅やらルイズ達の地球ぶらり旅。機動
六課の異世界奮闘記、ラスボス+愉快的仲間達+ドミナント、sの
ドタバタ書きたいよー…シクシク

ブローグ1『ネームレスワーズ（名も無き者共）』、集う（前書き）

今回、初っ端からラスボスが登場します。

ブローグー、ネームレスワズ（名も無き者共）、集う

とある施設… もとい、遺跡と呼ばれる巨大な建造物の内部。

その地下最深部より三つ上の階にある広大な格納庫。そこには、とある平行世界でA.C.『アーマード・コア』と呼ばれる機動兵器が大量に並べられていた。

その格納庫の中を横切るように、数本の連絡橋が走っていた。その連絡橋の真ん中。そこを歩む一つの影がいた。

黒い長袖の服に長ズボン、その上にボタンを掛けずに羽織っている漆黒のロングコート。

ベルトには、黒い鞘に収まった一本の日本刀。銘は【黒帝】という。

髪は夜の闇を溶かし込んだように黒い。

蒼い瞳はまるで玉。しかし、その鋭い目と眼光が、相手に多大な畏怖を与える。

もう一つ付け加えると、瞳孔はまるで爬虫類を思わせる。

その影は青年だった。

だがその身に纏う雰囲気は、人にしては異質過ぎた。

それはそうだ。

なぜなら彼は…

人を止めた存在なのだから

青年が連絡橋の真ん中辺りに差し掛かった時、向こうから一人の人影が近づいてきた。

どうやら、男性のようだ。

医者や科学者が着る白衣の上からさらに金色に縁取られた赤い外套を身に着けていた。

髪の色は金色。

瞳も金色だ。

「御帰りになられましたか、ダーク殿。いかがでしたかな、今回の成果は？」

男は、ダークと呼ばれた青年に話しかける。

「…まあまあと言った所だ。…地球の南極大陸の中央、南アメリカ大陸にあるアマゾンの熱帯林の奥地、太平洋のど真ん中、日本…特に沖縄と北方領土付近、そのほかの場所で大量の例の、鉱石、」

を大量に見つけてきた…。詳しくは後で伝えよう…。」

「おお、それは喜ばしい誤算ですな。あの世界に、あれは存在しないものと思いましたが…。ところで、私の頼んだ例のものはありましたかな？」

「…あの『鬼械神』に関する資料か…？一応『リベル・レギス』と『ロードビヤーキー』、『クラーケン』のを手に入れることはできたが…だが、此方には『ドミナント』がある。正直、必要ないのではないか…？」

「保険ですよ。戦力は多いことに越したことはありませんから。」

「…そうか。オレは今から少し休む。…人を止めた身だが、やはり疲れがあるからな。」

「承知いたしました。…では、御ゆっくりと…っとその前に」

男はハッとしたかのようにダークに訪ねる。

「…どうやら、人間共が『施設』を次々発見しておるようですが、どういたしますか？」「…人間共め…まだ計画の実行まで時間がある。それまで手段は問わない、奴らの妨害を行え。出払っている他の者達にもそう伝える。」

ダークはそう言い終えると、そのまま最深部に向かった。

「…ふむ、では今から他の者達に連絡するでしょう。それが済んだら資料を調べてみるか。」

男は、そう呟くと、闇の中に消えていった…

「あゝ…、ただ単に連絡橋歩いていっただけだからな？…全く、ダイク殿は妙なところでケチる事があるからなあ…」

さいですか。

だから暗いのかこの中…；

「ちなみにほかの施設でも現在節電中だったりする。」

…なんかラスボスに思えなくなってきたな…。

その後、男はブツブツと独り言を言いながら上の階層に上がっていった。

その内容は、やけに姑じみていたのであった…；

ブローグー、ネームレスワズ（名も無き者共）、集う（後書き）

あゝ、大学が思ったよりキツイ…でも頑張るしか道はないのだ。

ダーク「…頑張れとしか言いようがないな…」

あつという間？人物紹介していくわん　くラスボスとヒーローサイド【主人公編】

今日2度目の投稿。

びば！1日連続投稿！

ダーク「…上の2号は気にしないでくれ…」

あつという間？人物紹介していくわん　く　ラスボスとヒーローサイド【主人公編】

ダークIIブルズアイズ　18歳　男

今作のメイン主人公にしてラスボス。

人間止めちゃった青年。

服装と髪は黒一色。

髪型はモンハンでいうレウスレイヤー。

武器は黒い日本刀。長いめのやつ。

もうバツバツバツ斬りまくる。三倍速く動きまくる斬りまくる。

実は一回死亡済み……………え？後、双子の弟がいる。

白銀　武　男

『マブラヴオルタネイティブ』の主人公。

今作では、あの世界を救い、役目を終えて戻ってきた。

実は、あの世界の記憶が残っているそうだ。

ヒーローサイドの中で戦術機などの操縦センスがずば抜けている。

後、恋愛原子核。

平賀　サイト　男

『ゼロの使い魔』の主人公にしてルイズの使い魔。

ガンダールヴのルーンを持つ。

今回はダークの妨害の性で地球にルイズ+αと一緒に跳ばされる羽目に…

カルマ　女

『テイルズ オブ ザ レディアントマイソロジー2』の主人公。
ディセンドーと呼ばれる存在。

見た目は16才辺り。髪はオレンジに近い赤色。

武器は剣と斧と杖。

合体させるとハルバードになる。

高町 なのは 女

『魔法少女リリカルなのは』の主人公。

時空管理局のエース。

別名、管理局の白い悪魔。（デストロイされなければ不用意に
口に出さない事）

今回は、行方不明になった調査団の搜索のために機動六課と共に出
撃。

そこから、ダークの計画に巻き込まれていく。

ストームIIブルズアイズ 18才 男

作者が別サイトで書いている小説『テイルズ オブ フロンティア』
の主人公。

一騎当千の実力の持ち主。しかし父親には勝てない（彼曰く、デタ
ラメ人間）

今回は、とある依頼で兄のダークと邂逅する事になる。

武器は基本的に長剣と二丁拳銃。

性格はお人好し。

なお、ダーク共に切れ目だが、こちらの方が優しい感じ。

あつという間？人物紹介していくわん　ゝラスボスとヒーローサイド【主人公編】

この作品のOP　EDは

OP『shadow in the dark^{いづつかな}』

ED『涙(HY)』

必要悪、暗躍する　ゝわんゝ（前書き）

さあレッツプレイ！

ダーク「…まずい、あの〇〇〇〇を思い出した。笑いが…ククツ…」

西博士「へ、へーんだ！〇〇〇〇て言った奴が〇〇〇〇なのである
！ヤーイ〇〇〇〇！…！」

必要悪、暗躍する　くわんく

くとある惑星　ここは、管理局が第67管理外世界と呼んでいる世界。

特徴は人が住んでおらず、森林や草原などが広がっていること、比較的穏やかな気候であること、危険な原生生物がほとんどいない事。

要するに、平和以外何もない世界である。

だが、この世界にもあの“遺跡”が存在する。

その内部にも、あの巨大兵器群や機械兵が有象無象のごとく存在するのだ…。

その遺跡の地上にある出入口。

そこから、二人の人影が出てくる。

一つは肩を露出させた黒のローブ。

金色の長髪。

赤い瞳に切れ目の外見20才前半の女性。

もう1人は白色の髪に、フードの付いたパーカーに短パン。

同じく赤い瞳に無表情な目の、15才辺りの少女。

「レイちゃん。今日は一緒にこの世界であの“メタロン鉱石”を探しましょうね」

「…それは良いのですが、変なことしたら眉間をライフルでぶち抜くので気をつけて下さい。」

「ああんもう冷たいわねえ…。でも、お姉さんはレイちゃんのそんなところもス・キ・ム？」

「…このロリシヨタペド変態痴女（…）」

少女　レイは、彼女の可愛さ？の余り身悶えている女性に、かなり凄い暴言を吐くが、女性はまだたく気にしないでこれか、何やら顔

にほんのり赤みを出して、息を少し荒げる。

「ああ…、レイちゃんに罵られるのって、いつやられてもイイものだわ…（うつとり）……………あゝんレイちゃんっ！！もつと罵っせ（ターンッ！）あうん」

「…だ・か・ら、変なこと言っでないで、さっさとリオレウスなりビャーキーなりオルガロンなり召還してください。ミラさん。…真^ま逆^{さか}、歩いて行くなんて言いませんよね？（ゴゴゴゴゴ）」

レイは、女性 ミラの眉間をライフルで狙い撃った。ゼロ距離で。そして、背後から何やら黒いオーラを出しながら、倒れたミラを見下ろす。

「…はゝい、分かったわよレイちゃん。さすがに歩いて行くのはイヤだから、ゝあの子ゝでも喚びましょうか。」

ミラは、何事も無かったかのように起き上がった。なんということでしょう（。□。；）

だが、無傷という訳では無いらしく、眉間にはバツテンのようにバソコウが張つてある。

ミラはそれを気にすることなく、右手を上に掲げる。

すると、そこに炎が燃え上がり、すぐに消える。

そして、消えると同時に、その手には奇怪な刃、バルザイの偃月刀ゝが握られていた。

ミラは、その偃月刀で目の前の空間を切り裂いた。

何もない空間に、大きな切れ目が出来、その切り目の向こうから、何やら禍々しい眼光が煌めく。

数秒も経たないうちに、切れ目はさらに広がり、広がりきると同時に、向こう側から巨大が出てくる。

それは赤い甲殻に、空を溶かし込んだかのような色の、爬虫類を思わせる瞳、そして大地を踏みしめる二本の足に、一对の力強そうな翼。

それは首をもたげ、空を仰ぎ見て、咆吼をあげる。

『餓■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ツ!!!!』

それは異世界の飛竜…リオレウスである。

「さ、行きましょうか。レイちゃん？」

「…では、速く終わらせて帰りましょう。」

ミラとレイは、低く屈んでいるリオレウスの背に跨る。

二人が跨るのを確認すると、リオレウスは翼を力強くはためかせ、

一気に上昇。

あっと言つ間に、点にしか見えなくなる。

そして、二人と一匹は目的の場所に向かって、飛翔するのだった…。

「おまけ」

ミラ「ねえレイちゃん。帰ったらお姉さんと良いことしない??」

レイ「…もう立てなくなるほどやられるのがイヤなので、お断りさせていただきます。」

ミラ「もう、レイちゃんって恥ずかしがり屋さんね。それにやられてたねはレイちゃんじゃなくてわたs「証拠隠滅！（タアンッ！）」あふう」

リオレウス「（・|・:）」（二人をどう落ち着かせようか考えている）

T o b e c o n t i n u e …

必要悪、暗躍する　くわん　（後書き）

今回、やっとあの2人を出せた。
此処でもって向こうの作品でも、あの2人はあんな感じでは、まだ次回に！！

必要悪、暗躍する つー + 白銀 武、帰還する。(前書き)

今回、あの「青臭い救世主」と呼ばれた少年が登場します。

ダーク「…まあ、ゆっくりしていつてくれ…」

必要悪、暗躍する　つー　＋　白銀　武、帰還する。

「中華人民共和国、首都のとある高層ビルのとっぺん」

「ここ、中華人民共和国、略して”中国”は近年、驚異的な経済発展を遂げたのは、皆様のご存知の通りである。」

だがそれにより、様々な問題がおこっているのもまた事実。

また、その中国の動きを不愉快に感じている国や組織もあるようだ…。

そして、この高層ビルの屋上にも、そんな不満を持つ人物が一人…。

「まったく…、この国の奴らは後先考えずに突っ走りやがる。その先に何かがあるか理解しないままにな…。」

そう呟いたのは、一人の17歳辺りの少女。

青い髪に、緑色の瞳。右目に眼帯。

そして何より、目を惹くのは右腕と右太股の無骨な機械の手足…。

それは、異世界の技術の結晶、オートメイル機械鎧である。

そんな思想に浸っている少女の背後に、突如一人の影が現れる。

それも歩いてなどではなく、まるで最初からそこにいたかのように…。

その影は、16歳ぐらいの少年だった。

髪は灰色で、瞳は水色。

青色がメインカラーの何処かの学園の制服に長い赤色のマフラーと言った、妙な格好であった。

「ミゼル、また何か考え込んでるの？」

「…アツヒロか。随分と遅かったな？」

「まあね。`時空管理局`の`ロストロギア保管庫`には簡単に侵

入できるから、少しあの「クラナガン」って都市を観光してたのさ。…自由気ままにね。」「流石、ジャンパー（空間移動能力者）」、行き先は無制限とはそのことか。…ところで、あれはあったのか？」

「『ジュエルシールド』と『レリック』でしょ？ちゃんとあつたよ。今頃はもうダークさんに届いてるはず。」アツヒ口と呼ばれた少年は、前髪をいじりながら答えた。

それに対して、ミゼルは疑問を口に出す。

「…なぜ、ダークはそんな物を集めさせたんだ？単純にエネルギー目的だとしても、レリックですら『メタトロン鉱石』の百分の1にも満たないぞ？」

「…正確に必要としてるのは、アンセス博士なんだけどね。」

「ああ、あの天災か。」

「ねえ、今の誤字？」「それ意外ないだろ？…なあ、今何時だ。」

ミゼルは、唐突に尋ねる。

「えっと……、もう1時半だよ。」

アツヒ口は、腕時計を見ながら答えた。

「もうそんな時間か。」

「じゃあ、奈良市の青山町近くの『大黒』って食堂に行く？」

「…またそこか。飽きないな、お前も…。」

「良いじゃないか。あそこのカツ丼定食、かなり美味しいからね。ほら、手を握って？」

アツヒ口は、手を差し出し、その手をミゼルが握る。

ヴォーンッ！

その瞬間、2人の姿が一瞬で消え去った。

僅かな空間の歪みを残して…

+ 日本、関東のとある街 +

この街の、とある一軒家で少年は目覚めた。

少年は、あの世界を救うため、奮闘した。

結果、世界は救われた。

しかし、彼は…大切な存在を守ることが出来なかった。

少年は役目を終え、この世界に戻ってきたのだった…

少年は、ベッドから上半身を起こし、隣を見る。

そこには、蒼い髪の少女が、少年の記憶通りに眠っていた。

その時、ドアの向こうから、ドタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

そして、少年は窓の向こうに広がる青空を眺め、涙を流しながら呟く…

「…やっと、戻ってこれたんだ…」

これから先、少年とその仲間達は、大きな運命に巻き込まれていくだろう。

それは、同時に新しい出逢いももたらす。

神よ。もし、あなたが本当におられるのならば、彼らに祝福を……。

平賀サイト& a m p・ルイズ+ α 、奈良の大地（平城宮跡）に立つ（前書き）

2号「や…ヤバい；睡魔が…」

ルナ「もう夜中の一時じゃない…」

ダーク「…丑三つ時になる前に寝よう…」

白銀 武「あー…俺も限界だ…」

ストーム「と言うわけで…」

全員『おやすみ…？』

平賀サイト&ルイズ+α、奈良の大地（平城宮跡）に立つ

平城宮跡…それは近畿地方の奈良県に存在する古い都の跡である。

2010年に「平城遷都1300年祭」があり、その時は大いに賑わっていたが、今は元の静かな都の跡または草原に戻っている。

普段なら、この中には散歩をしている人がいたり、子供がいたりするのだが、今の時刻は朝の6時20分前であり、人影は殆どない。

その平城宮跡にある県道104号線沿いにある休憩所…

その休憩所の中の空間に有り得ない現象が起こっている。

「……ピキッ……」

「ひび」だ…ひびが入っている。

本来ひびが入ることなど有り得ない空間に、大きなひびが入っているのだ。そのひびは次第に大きくなり、遂に…

「ガシヤアアアンツ！」

割れた。まるでガラスのように割れたのだ。

「「うわあああああつ！」」

「「きやあああああつ！」」

「……っ！」

「きゅいいいいいっ！」

そうして出来た黒い空間…その中から、少年2人と、少女5人が放

り出される。

その内の2人…黒髪の少年と、蒼い髪の小柄な少女は何とか受け身をとったが、残りの5人はズべべつと地面を滑ることになった。

「ふう…おゝい、みんな大丈夫か？」

黒髪の少年 サイトが、立ち上がりながら声をかける。

「私は大丈夫。」蒼い髪の少女 タバサが、ズレた眼鏡を直しながら返答する。

「僕も無事…なのかなこれは…？」

金髪の少年 ギーシュが鼻を押さえながら、体を起こす。

「だ、大丈夫な訳ないでしょ！？顔から地面にダイブしたのよ！！
#」

長い桃色の髪の少女 ルイズが、目尻に涙をためて叫ぶ。
よく見ると、鼻が少し赤くなっている；

「きゅ……」

「きゅい…」

残りの三人 キュルケ、シエスタ、シルフィードは目を回して伸びていた。

カランッ

「いてっ！」

その時、塞がりかけたひびの間から一本の剣『デルフリンガー』が

吐き出された。

「おい相棒！　いったい何が起こったんだよ！？」　奴らと戦ってる時に、いきなり緑色の光がピカツと光ったら、いきなりこんなところ…」

デルフは混乱しているのか、サイトに慌てて尋ねる。

「落ち着けよデルフ！　俺にも何が何だか…って」

サイトは当たりを見渡しながら、あるものを見つける。

「じ…自販機？」

「自販機って、この妙な鉄の箱の事なの？」

「どんなもの？」

ルイズとタバサは、その自販機をみる。

「簡単に言ったら、金を入れれば、あとは商品を選べば良いってやつだよ。」

「それは随分便利だね。」

サイトはタバサとルイズに簡単に説明する。

ギーシュも、その説明を聞いて自販機をまじまじと見る。

「…自販機が此処にあるって事は…」　サイトは辺りを見渡す。
彼の目には…

アスファルト舗装された道路…

見慣れた形の住宅…

休憩所にある建物の自動ドア…（今は時間外なので動いてないが）

そして、遠くに見えるビル…

彼はやっと気づいた…そう、此処は、この世界は…

「戻ってきたんだ。もとの世界に…」サイトは呆然と立ち尽くす。
無理もない、このようになんの突拍子もなく、いきなり自分の生まれ育った世界に戻ってきたのだから。

「ええ！じゃあ此処がサイトのいた世界なの！？」

「……！！？（驚きのあまり絶句）」

「ま、まさかこんな形で君の世界に来ることになるとはね…」

「それにしても、なかなか良いところじゃない…」

「キュルケ！？あんたいつの間にか…」赤い髪に褐色の肌の少女
キュルケが、いつの間にかルイズとサイトの後ろに立っていた。

因みに、まだシエスタとシルフィードは起きておらず、休憩所の中にあつたベンチに寝かしてあります。

「さてと、とりあえず此処が何処か調べないと…ギーシュ、ついてきてくれ。ルイズ達は此処で待つてて。」

「分かった。それじゃ行ってくるよ。」

「早く戻ってきなさいよ…」

サイトはギーシュを連れて、休憩所から出る。
ルイズ他4名は待機することになった。

休憩所を出て、2人はすぐ石で出来た案内板を見つけた。

「お、これは此処の地図じゃないかな？サイト、ちょっと見てくれ

ないかい。なんて書いてあるかさっぱりだ！」

「了解。えーと、ちよつと待てよ……」

ギーシュはこの世界の文字が読めないようだ。

サイトがその案内板を隅々まで見つめる……

「……ん？」

調べてる最中、サイトの目に案内板の左下に書いてある文字が止まる。

、 平城宮跡、

「へ、平城宮跡？……ってことは……」

その数秒後、サイトは驚愕？の声をあげる。

「跳ばされた場所って……奈良県かよお！！？……」

因みに、この場面……

「若いもんは、ほんと元気じゃの〜」

朝のジョギングしてたじいちゃんにバツチリ目撃されました。

平賀サイト& a m p・ルイズ+ α 、奈良の大地（平城宮跡）に立つ（後書き）

2号の置き手紙『ボーダーブレイク・エアバースト…マジパネエベ
ストマストスモイバイ……!』

必要悪、暗躍する すり〜（前書き）

2号「プレステ3マジで欲しい」

ダーク「…では、始めよう」（無視）

必要悪、暗躍する すり〜

日本の都市、横浜。

そこのある街にある30階立てのビル。

このビルを所持しているのは、最近急成長している企業。名称は『ムラクモ・ミレニウム』と言う。

…どっかで聞いたような名前だが、スルーでおk。

そのビルの15階にある社長室。

中は窓際に大きめのデスクと黒色のシンプルな高級感を漂わせる椅子がある。

因みに、中には誰もいない。

デスクの上には、何かの資料が何枚か置いてある。

よく見ると、幾つかの単語が見て取れる。

『メタロン鉱石』『管理局の最近の動向』『ネスト、アーセナル、ポート、ベースの内部構造』『鬼械神の記述が掲載されている魔導書の搜索』『ドミナント』『遺跡調査隊の妨害または排除』

…内容からして、平和的な商業関連の資料ではないらしい。

「ガチャッ」

しばらくして、部屋に2つの人影が入ってきた。

一人は、眼鏡をかけ、スーツを着た黒髪の男性。

見た目は20歳以上だろうか…

もう一人は、紅いジャケットに黒のジーンズを着た、首まで伸びた金髪に糸目の青年。

一見穏やかそうな印象だが、青年が発する「人外」の気配がそれを否定する。

「さて、アラン、例のものは…」

「ええ、しっかりと持ってきましたよ。」

アランと呼ばれた青年は、内ポケットから数本のUSBメモリを出し、男に手渡す。男はそれを受け取って、満足そうに笑う。

「確かに、`デバイス`と`リンクス`、`マッスルトレーサー`のデータ、受け取らせて貰った。これで、彼女の願い`に貢献できる…。`」

「それにしても、あなたが彼女の願いを理解してくださって助かりましたよホント…」

「寧ろ、彼女の願いを理解出来ない奴らの考えを私は理解出来ん。彼女の願いこそが、`全ての世界`を救済することが出来るたった一つの方法だというのに…」

「仕方ないですよ。`第一人類`共には、彼女の願いは到底受け入れられないものですからね。」

男の疑問に、アランは悲しそうに微笑みながら、答える。

「…では、僕はここで失礼させていただきます。」

アランは、そう言つと部屋から出て行く。そして、出るときに振り返り、こう告げる。

「これから仲良くやっていきましょう。…黒柳 颯斗社長…」

+とある管理外世界+

見渡す限りに広がる砂漠…その中にそびえ立つ金属でできた忌まわしい遺跡…

ダーク達は『ネスト』と呼んでいる。

そのネストの入り口の前に夥しい数の死体が散乱していた。服装から見て、`時空管理局`の魔導士とその調査隊のようだ。どの死体にも、何本もの`銃剣`が刺さっていた…。

その中を平然と歩く影がいる。

よく見ると、モスグリーンのロングコートをはおり、コートの下にコンバットスーツを着た、黒い髪の青年？だった。なお、左目は青で、右目は赤のオッドアイである。

青年？は近くにあった魔導士の少女の死体を掴むと、その首にかぶりついた。

じゅるっ　じゅるっ　じゅるっ

そして、血を美味そうに啜り始めた。

・ 数分後

青年？が血を吸い終わると同時に、入り口から一人の男が出てきた。

黒いマントをたなびかせ、黒い鎧を纏った、黒い髪の男だ。背に無骨な大剣を背負っている。

「おやおや、ガッツ。もう終わらせたのですか？」
青年？が男　ガッツ　に気づき、話し掛ける。

「ああ、中に入り込んだ60人全部片付けた。あとは奴らの戦艦だけだ。」

「そちらはあの三人に行かせました。もうカタが着く頃ですよ。青年？のその言葉に、ガッツは顔を歪める。

「　　ロウザン、やっぱり彼奴等も戦わせるのか…」
「…ええ、あの三兄弟が望んで…ね」

ガッツの問いに、ロウザンは当たり前のように答えた。

「では、私は中に戻ります。暑いのは苦手ですので。」
ロウザンは、そう言うと言跡の中に入っていた。

残ったガッツは雲一つ無い空を仰ぎ見る。

「…結局、こうなる運命だったのかよ…スッキリしねえ…。」

彼の顔には、後悔の念がありありと浮かんでいた…

閑話と言つ名の説明文『ドミナントなどについて』（前書き）

2号「今回は単語の説明文みたいなものです。とりあえず、読んでいたら物語が少し分かりやすくなるとおもいますが……」

大十字 九郎「マスタアアアアテリオオオオンツツ……」

マスターテリオン「大十字九郎おおおつつ……」

ストーム「うおおっ！なにドンパチやらかしてんだ此奴等は……」

武「う、うわ……っ……」

エミル「あわわわ、これ絶対拙いよ……」

なのは「落ち着いて、落ち着いてタイムマシンを探すの……」

フェイト「なのはが一番落ち着いて……っ……」

マルタ「そんな漫才やつてる場合じゃないでしょ……っ……」

サイト「みんな逃げろ……っ……」

西博士以外「わ……っ……！！……」

ウエスト「ををう！？皆の衆？何処へ行かれるのであるか！？あれれ？君達是我輩を置いて、自分達の夢を追いかけて、旅立ってしまうのであるか……」

閑話と言つ名の説明文『ドミナントなどについて』

ドミナントについて…

メタトロン鉱石を材料として造り上げられた、無機生命体型戦闘兵器^①のこと。

『軍団規模の敵対勢力を赤子の手を捻るが如く、容易く排除出来る戦略兵器』

『戦場の主役を再び人に』をコンセプトに、第一〜第三世代までが製造された。

第三世代は前世代と違い、メタトロン鉱石を惜しみなく使って、一から製造された。

（なお、第一世代は人間の死体から、第二世代はクローニングされた素体に、メタトロン鉱石から作られた人工筋肉と、強化骨格、量子コンピュータを移植して製造されている）

ドミナントは、全世代に、コア^②と呼ばれる機関を内蔵している。

コアは、巨大兵器に特殊な加工を施し、圧縮、球体の形に整える。

コアは、ジェネレータとラジエータとして機能し、文字通りドミナントの、心臓^③である。

特に第三世代には、ACCネクスト^④をコアにしているため、前世代を遥かに超える性能をほこる。

なお、第二世代、第三世代はコアをオーバードライブ（任意に暴走一步手前まで負荷をかける）ことで、コアに使用されている巨大兵器そのものに姿を変えることが可能。

ただし、第三世代はマスターの許可が必要になる。

リンクスについて…

リンクスは、ドミナント達が携帯している強力な兵器で、通常時は水色の半透明の六角形の板（手のひらサイズ）である。

材料はメタトロン鉱石で、六角形の板状に加工したあとに、特殊なコンピュータを使い、武装のデータを入力することで完成する。

ただし、使用するには登録が必要。

武装の種類も、剣や銃から、バイクや盾、ガンブレード、果てには戦艦などと、ドミナントによって千差万別。

なお、一部のリンクスには、精神汚染を起こすものもある。

しかし、ドミナントにはリンクスによる精神汚染を防ぐための特殊なフィルターがあり、通用しない。

そして、リンクス最大の欠点は、登録さえすれば人間にも使用可能ということだろうか…

メタトロン鉱石について…

シリコンをベースとした高分子金属の複合体。

マナ、魔力、音素、G元素、源素など異なる高密度のエネルギー

ーを秘めている。

そのエネルギー量は、拳大の鉱石一個で…例えるならガンダム00のオリジナル太陽炉何十台分にあたる。

用途も装甲、動力部、量子コンピューターなど様々なものに使える。

因みに、メタトロン鉱石を何らかの要因で人体に取り込んだ場合、そのメタトロン鉱石は人体を侵蝕し、人体を急速に作り替え、人間を^{ウィラー}Willer[〃]と呼ばれる存在に[〃]進化[〃]させる。

もし、ただの人間でいたいのなら、素手で触れないこと…

ネクストについて…

^{アイマードコア}

〃AC[〃]と呼ばれる機動兵器を、メタトロン鉱石をふんだんに使って、より戦闘に特価したものしようとされていたが、何時しか『神の模造』と内容が変わっていった。

残念ながら、これ以上の詳しい情報は載せられない。

此処から先の情報はまだ閲覧できない…

閑話と言つ名の説明文『ドミナントなどについて』（後書き）

…ただの荒野が続いています…

2号「じ…次回も楽しみに待っていてください……ガクッ」

起動六課 動く（前書き）

2号「あー…時間掛かったな今回。」

ダーク「…では、今回の話だ。時間を空けたせいで、おかしい部分もあるが、少しづつ訂正してゆくので…」

起動六課、動く

拠点であるネストの地下最下層にある円形の広場。

内部には、メタトロン鉱石から作られた六角形の柱が円を描くように立ててあった。

その円の中心に向かって、シナプスのような光の線が走っていた。

その光は、まるで鼓動しているかのように点滅していた…

広場の中央…光が行き着く先に、一人の影が立っていた。

それはまるで、鎧かロボットのように見える…

色は黒く、鋭角的で、見る者に禍々しい印象を与える。

中央に辿り着いた光は、足元から吸い上げられ、体全体を廻っていた…

光がそれに吸い上げられていくにつれて、そのバイザー状の目らしきものが緑色の光を爛々と輝かしていた…

『ダーク殿、少しよろしいですか？』

突然、その目の前に空間に浮かぶ半透明のディスプレイが浮かび上がり、そのディスプレイにアンセスの顔が映る。

数秒後、その頭部から煙が噴きだし、装甲が展開して、複雑な変形を行いながら、胴体部に収納される。

収納された装甲の下から、あのダークの頭部が露わになった。

「…なんだアンセス？厄介事でも起こったのか…？」

『ええ、その通りですよ…しかしダーク殿、メタトロンのエネルギーを吸収する度にその姿になられておりますが…面倒ではありませんか？…』

「…生憎、この状態の方が通常の姿でやるのに効率が良い…それより、何があつた？」

ダークがアンセスに問いかけると、アンセスは苦虫を噛み潰したような表情になつた。

『…ミッドチルダにあるアーセナル02に向かつて、起動六課が派遣されました。』

「…起動六課…あのエースオブエースのいる…」

『その通りです。…しかもスターズ、ライトニング、ロングアーチの主力を総動員しております。』

「…随分と豪勢なことだ…」

『なぐにを暢気なこと言つてんですか！…まだ始まってないうちに、奴らに我々の計画がバレたりしたら、進行に多大な悪影響がでるのは確実なんですぞ！』

あなた様はそういったことも考えてもらわんと困ります…！』

「…すまん…」

アンセスの説教されて、ダークはシヨボーン（…ω…）となる。

『ダーク殿、一刻も早く奴らを始末するかなにかしないといけませんぞ…！』

「…言つておくが、始末は出来ん。…彼奴等はこの計画の要の一つだ…」

『では、いったいどうするおつもりですか？…』

アンセスの疑問にダークはこう答えたのだつた…

⋮
⋮
⋮
⋮
⋮

「
⋮
オレが直々に迎え撃つ
」

『……………はい?』

side：起動六課

ミッドチルダのとある広大な森林地帯。

その上空を、7機のヘリがある場所を目指して飛んでいた。

そのうち、先頭を飛ぶ2機に起動六課の主力、スターズ、ライトニング、ロングアーチのメンバーが乗っていた。そして残りのヘリには、それに同行する事になった、各部署の武装局員達が乗っている。

数分後、起動六課の部隊長である、八神 はやて からほかのヘリへ通信が入る。

『みんな、改めて説明させてもらうで。今回の任務は、最近になって各次元世界で確認されてる、遺跡 にむかった調査団の捜索や。』

はやての説明に、皆耳を傾けている。

『これには、あの反管理局組織の、ネームレス・ワンズ が関わってる可能性が高い。十分気をつけて今回の任務に挑んでな。』

『『『はいっ!』』』

はやての説明が終わり、皆返事を返す。

隊員達の士気は、非常に高いようだ。

「待っててね、ユーノ君…！」
先頭を飛ぶヘリの中で白いバリジャケットを纏った女性…高町
なのはが、見え始めた遺跡…ミッドチルダ・アーセナルを見つ
めていた…。

その目に確かな不屈を宿して…

「主はやて、やはり今回の出来事も…」

「間違いない、あの男や…！」

なのは達のヘリとは違うヘリの中では、はやてと彼女に仕え
る守護騎士達ヴォルケンリッターが向かいあっていた。

その顔には、なにやら緊迫したものが感じられる。

「はやて、今度こそ…！」

「さあ、首洗って待つときや！ダークブルズアイズ！」

起動六課 動く(後書き)

次回、激突!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0972s/>

ド・ド・ド・ドミナント！

2011年11月11日22時19分発行